

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520012

研究課題名（和文）：

現代フランス哲学の諸思想を介しての西田、田辺哲学の組織的再解釈の試み

研究課題名（英文）：

A Systematic Reinterpretation of the Philosophy of Nishida and Tanabe through the thoughts in Contemporary French Philosophy

研究代表者

杉村 靖彦 (SUGIMURA YASUHIKO) 京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：20303795

研究成果の概要（和文）：

レヴィナス、リクール、デリダ、アンリ等の現代フランスの哲学者の思索を通して西田や田辺の哲学の組織的な再解釈を行った。とくに、西田と田辺における「自覚」概念とハイデガーの影響下で現代フランスの哲学者たちがそれぞれに展開する「証言」概念を突き合わせ、そこから双方で展開されている身体性、社会性、歴史性に関する独自の考察の哲学的・今日的意義を引き出すことができた。

研究成果の概要（英文）：

In this research project, we made a systematic reinterpretation of the philosophy of the Kyoto School, especially that of Nishida and Tanabe, through the comparison with some French contemporary philosophers (Lévinas, Ricoeur, Derrida, Henry, etc.). A special attention was paid to their concepts of “self-awareness” (Kyoto School) and “testimony” (French philosophy). With this approach, we succeeded in understanding philosophical and actual significations of their singular thoughts concerning corporality, sociality and historicity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学（哲学・倫理学）

キーワード：日本哲学、現代フランス哲学

1. 研究開始当初の背景

本研究開始時まで、研究代表者は主に現代フランス哲学の専門研究を遂行し、それを通して「現代の宗教哲学」のあり方を探る思索を遂行してきた。他方で、京都学派の哲学の伝統を色濃く受け継ぐ京都大学の宗教学専修で学び、教えてきた者として、西田や田辺の思想から有形無形の影響を受けてきた。そして、現代フランス哲学の研究に通りのまとまりが付き、先鋭的な哲学批判を内に含みつつ哲学を遂行するそのラディカルで繊細な思索を「現代の宗教哲学」へとつなげる道が開けてくるにつれて、それと連関づけて西田や田辺の哲学を新たに活用していくための方向性が見えてきた。

従来フランス語圏では、京都学派の哲学に関しては、とくに哲学研究という文脈では十分に取りあつかわれてこなかったし、また翻訳された著作もごく少数であった。しかし、研究代表者が早くから助言・指導を行ってきた何人かの仏語圏日本哲学研究者たちの尽力によって、本研究の開始時には、京都学派の哲学の基本概念は、日本哲学という枠を超えて、仏語圏の哲学者・研究者たちの関心を強くかきたてるものとなりつつあった。そうして、研究代表者がフランス哲学研究の文脈で交流してきた仏語圏の研究者たちとの間でも、京都学派の哲学を話題にできるような状況になってきていた。

2. 研究の目的

本研究は、1 に述べたような個人的な研究経歴と国際的な研究環境の双方において機が熟したのを受けて構想され、実行されたものである。その主たる目的は、以下の3点に要約されるものであった。

(1) 西田や田辺の哲学をレヴィナス、リクール、デリダ、アンリといった現代フランスの哲学者たちの思索を通して組織的に読み直すことによって、彼らが創始した京都学派の哲学が、単に西洋哲学と全く別の精神的伝統の表出なのではなく、20世紀前半に西洋哲学を揺るがせ転換させた根本問題を西洋の哲学者たちと共有し、それに独自の仕方でも応答した「もう一つの現代哲学」という意味合いをもつものであることを示す。

(2) (1)と関連して、西田や田辺の思索と上記の現代フランス哲学者たちの思索が、従来の意味での哲学がそれを根本的に問いに付す「非哲学」との臨界点に立たされ（前者の場合は非西洋における西洋哲学の全面的な摂取、

後者の場合はポストモダンの状況における哲学自体の根本的問い直し）、「哲学そのものの再定義」を余儀なくされる中で生じたものであることを念頭におきつつ、双方で編み出された特異な方法論的手続きに焦点を当てた比較研究を行う。その際、京都学派の側では「自覚」、現代フランス哲学の側では「証言」という概念に的を絞る。

(3) (1)、(2)に述べた仕方で、京都学派と現代フランス哲学との突き合わせを、哲学者間の様々な組み合わせに基づいて、また様々な問題に即して行い、その成果を西田や田辺の組織的な再解釈につなげていく。それによって、彼らの思索が持つ潜勢力を解き放ち、上述のフランス哲学者たちが先導してきた議論空間へとそれを導き入れて、今日の哲学的議論において国際的に共有可能なものへと仕上げ上げていくことを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、西田や田辺の思索を現代フランス哲学と単に並列的に比較するのではなく、比較作業を通してその潜勢力を露わにされた彼らの諸概念を現代フランス哲学の議論空間に導き入れることまでも目指すものである。それゆえ、研究の方法と進め方に細心の注意を払うことが必要であった。とくに工夫をしたのが以下の2点である。

(1) 西田や田辺の思索を現代フランス哲学の議論空間に投入する作業がこちら側の独り相撲に終わらないように、つねに国際的な交流と議論を行える機会を作り、こちら側からの「投入」の企てに対して、日本哲学に対する十分な興味と知識をもたない外国人哲学研究者から直接に反応を得られるようにしておく。そして、そうした反応をつねにその後の研究にフィードバックするように努める。

(2) このような種類の研究は、どうしても大づかみで漠然とした対比を提示するだけで終わってしまいがちである。それを避けるために、本研究では、そのつどの作業において扱う問題と範囲を厳密に画定しつつ考察を進めることに最大の注意を払う。「2」で述べた双方の特異な思索を支える方法論的概念（「自覚」と「証言」）への注目は、すでにそうした配慮の一角をなしている。加えて、ハイデガーに対する大きな意味づけと批判的関わりが双方を結ぶ共通の特徴であることを重要視して、双方におけるハイデガーへの関わり方の重なりとずれを様々な角度から

浮かび上がらせるという手法をとることで、考察に明確な輪郭を与えることに努める。

4. 研究成果

本研究の主要な成果としては、以下の3点を挙げることができる。

(1) 現代フランス哲学の諸々の証言論においてさまざまに展開されるハイデガー批判が、ハイデガーにおける自己の死の引き受けを通しての本来的自己の「証し」という主題の批判的受けとり直しという意味をもつものであることを明らかにする一方で、西田や田辺の「自覚」概念が、同じハイデガーの証し概念を「不十分な自覚」とみなしてその批判的乗り越えを図るものであることを示した。これによって、ハイデガー哲学をはさんで、現代フランス哲学の「証言」概念と京都学派の哲学の「自覚」概念の間にきわめて興味深い並行関係を見出すことができた。

(2) (1)の成果を起点とし、また、本研究で参照する現代フランスの哲学者たちのハイデガー批判が身体性、社会性、歴史性といった主題をめぐる独創的な思索へと展開することを踏まえることによって、1930年代・40年代に西田と田辺がそれぞれ彫琢していく行為的身体論に定位した歴史的世界論の哲学的意義を解明できたこと。

(3) (2)の成果を基盤として、本研究で手掛けた比較検討の作業にとって、1930・40年代の日本とヨーロッパの双方における思想的・歴史的状况の検討が重要な鍵になることが理解できたこと。ハイデガーとヘーゲル弁証法を独自の仕方で総合した1930年代のコジェーヴの仕事が現代フランス哲学を方向づける重要な源泉であることはよく知られているが、西田と田辺の歴史哲学もまた、ハイデガーを意識しつつヘーゲル弁証法をより徹底化しようとする中で出てきたものである。双方におけるヘーゲルとハイデガーの総合は、両大戦間の時代の危機と混迷と呼応するものであり、この状況の思想史的意味合いをさらに究明することによって、きわめて豊かな歴史哲学的考察へとつながりうることが予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①杉村靖彦 「死者と象徴—晩年の田辺哲学から」、『思想』(田辺元の思想—没後50年を迎えて—)、岩波書店、査読無、1053号、2012、36—56。
- ②杉村靖彦 「〈ポスト哲学的〉思索と〈宗教的なもの〉—現代フランス哲学と京都学派の哲学から」、『宗教研究』、日本宗教学会、査読有、363号、2010、21—41。
- ③杉村靖彦 「諸判断の葛藤—記憶・証言・歴史」、『フランス哲学・思想研究』、日仏哲学会、査読有、2009、13号、2009、48—58。

[学会発表] (計6件)

- ①Yasuhiko SUGIMURA 《Témoignage de la Vie, entre le philosophique et le religieux. Relire les Deux sources du point de vue d'«après-le-désastre», Colloque international sur «Bergson et le Désastre», Université de Kyoto, le 27 octobre, 2011.
- ②Yasuhiko SUGIMURA 《L'herméneutique du soi s'auto-éveillant selon L'Ecole de Kyoto: le mysticisme «évidé»?», Colloque de Cerisy-la-Salle sur «Stanislas Breton: philosophie et mystique», Centre culturel de Cerisy-la-Salle, le 28 août 2011.
- ③Yasuhiko SUGIMURA 《Demeurer vivant jusqu'à...»: la question de vie et de mort et le «religieux commun» chez le dernier Ricoeur, Colloque international sur Philosophie et Religion chez Paul Ricoeur, Université Féminine d'Ewha (Corée du Sud), le 22 avril 2011.
- ④Yasuhiko SUGIMURA 《L'idée de polarité, vue de Kyoto: polarisation de la Vie «auto-éveillante» chez Kitarô NISHIDA», Internationale Wissenschaftliche Konferenz: Denken in Gegensätzen. Leben als Phänomen und als Problem, Humboldt-Universität zu Berlin (Romano Guardini Stiftung), le 21 octobre 2011.
- ⑤Yasuhiko SUGIMURA, 《Auto-éveil et Témoignage - Philosophe autrement. Ecole de Kyoto en comparaison avec la philosophie française postheideggerienne, Conférences à l'Ecole Normale Supérieure, les 25 et 27 mai 2010.
- ⑥Yasuhiko SUGIMURA, Ricoeur et Derrida dans le contexte de la philosophie du «témoignage», Cours à l'Ecole Normale Supérieure, les 5, 12, 19 mai 2010.

[図書] (計3件)

- ①Yasuhiko SUGIMURA et al., *Jean Nabert*,

l' affirmation éthique, Stéphane Robilliard et Frédéric Worms (éd.), Paris, Cerf, 2010, p. 131-146.

② Yasuhiko SUGIMURA et al., *Philosophes japonais contemporains*, Jacynthe Tremblay(éd.), Montréal, Presses de l' Université de Montréal, 2010, p. 47-66.

③ 杉村靖彦、『揺れ動く死と生 宗教と合理性のはざままで』、ジャン・ボベロ、門脇健編、晃洋書房、2009年、219—234頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

[その他]

無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 靖彦 (SUGIMURA YASUHIKO)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20303795

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し